

0-15教育基本構想(案)に係るパブリックコメントと返答

磐梯町教育再デザインセンター

No.	ページ	意見	返答
1	P1	この基本構想を推進していく上で弊害となるのがいじめ問題です。今回の案にはいじめ対策に関する記述はありません。いじめはいつどこで発生するかわからないばかりか、いじめはなくなることはありません。この社会から少年犯罪がなくなることはないのと、人を見下したりマウントをとったり、又は自分の支配下に置いたりすることが何より快感であるという性格の人間が社会には一定数存在するからです。 いじめの無い学校が良い学校ではなくて、毎年いじめ対策を少しだけでもいじめを少なくしようとしていることをオープンにしている学校が良い学校だと思います。このいじめに関する対策としては、建設現場のKY（危険予知）活動、ハインリッヒの法則（ヒヤリハット）の活用も参考にしていただければと思います。	「いじめがなくなることはない」ということについては同様の認識でいます。だからこそ、問題として隠したり、なかったことにするのではなく、いじめを少なくしようとしていることをオープンにすることが重要であることについても共感いたします。これは、「人はみな違う」ということがあたりまえのこととして認識され、その「違いのある人たち」と共生社会をつくっていくためにはオープンな対話を通じた相互理解が重要であることを、子どもも大人も学んでいくことで、少しでも実現に近づくことができればと考えています。学校だけで実現を目指すことではないですが、子どもたちだけの問題ではないことを理解し、色々な場面や機会を考え、積極的に取り組んでいく必要があると考えます。
2	P6	「みんな」 個人的な体験からですが、強い同調圧力を含むワードに感じます。例えば、それぞれ、各自、一人ひとり などではどうでしょうか？	「みんな」という言葉には「子どもがいるかないかは関係なく」「年齢や性別、国籍も関係なく」「磐梯町の住民以外でも磐梯町に関わろうとする人たちすべて」という意味を含めて、あえて「」（カギ括弧）を付けて強調をしたつもりでいました。しかし、同調圧力のように伝わる可能性についても考え、違う表現で丁寧に伝えていけるようにしたいと考えます。
3	P7	「中学校では、責任を持って～」 年齢を重ねるにつれ責任を重視するのは当然ですが、中学で急に自分軸(自由・選択)が失われ他人への配慮(責任・べき)が強くなると表現されているように感じます。 「誰も」排除されない＝自分勝手が許される、ではないと同時に、共生を重視するあまり、我慢や同調を強いることもないように、と願います。	「自由には責任が伴う」という考えを基本に構想案を作成してきたところですが、「自由＝自分勝手ということでのいいのか？」というお声をいただくことが多く、少し「責任」についてだけが強調されるような文章になっていたと考えます。どちらも重要であり、偏って捉えるものでもないことが伝わる表現にしたいと考えます。
4	P12	磐梯町教育基本構想の「地域と学校園が連携・協働し、地域全体で子供たちの成長を支える」という理想論は良いのですが、実際のところは教育現場が末端までの対応をしなければならぬ状況なので、どうしても教職員の負担が大きくなり新しい取り組みにも躊躇せざるを得ないと思うところです。 もし、教育再デザインセンターが地域と学校園の間に入って、全ての問題・課題を教職員に代わって解決すると共に、それに関する全ての責任を教育再デザインセンターが負う形が構築されれば、学校園の教職員も働きやすいと思えるのではないのでしょうか。	「地域と学校園の連携・協働による教職員の負担減」については、言うほど簡単なものではない、ということは重々承知しているところです。地域との連携が教職員の負担感を高めることもあるのも事実かと思います。だからこそ、それらの現実を前提に、学校運営協議会や地域学校協働本部などの場を活用して、オープンな対話の場をつくっていく必要があると考えます。教育再デザインセンターは、学校運営協議会や地域学校協働本部のコーディネートや運営を担いますので、その中で保護者・教職員・地域住民との連携を促すことを目指します。
5	P15	小学校の選択制については同規模学校の選択制ではないので、各学校に特色や魅力が見当たらなければ選択肢は限られてくると予想されます。(1)学校が近いから、(2)児童数の多い方が楽しそうだから、(3)友達との関係が上手いから等々の、物理的要因と感情的要因です。このまま選択肢を実行した場合、児童数が多い方が楽しそうだからとして第二小の児童が半数以上第一小を選択する場合も考えられます。 第一小と第二小の各々の魅力を一般市民にもわかるよう発信していただきたいものです。	学校選択をする際に課題となる点については、ご心配されている通りの課題があると考えます。学校選択をする際に、物理的要因と感情的要因で選択することは、決して否定するものではないと考えると同時に、子どもひとりひとりに合った環境を保護者と共に選択ができるよう、各学校の特色をきちんとわかりやすく発信・共有すること、実際に学校の見学ができる機会をつくること、学校選択についての相談の機会をつくるのが重要だと考えます。
6	P15	「自分に合う学校」を選択 選択肢があることはありがたい反面、不安や悩みも増えるので、選択する親子のサポートをお願いしたいです。 校長・園長先生の学校経営ビジョン(思い)と、どのようにバランスをとるのか。 過保護になりすぎて、環境変化に対応する力がつかないのでは、という一抹の不安。	「自分に合っている」ということがどういうことなのかは、当事者だけでは見えないことも多く、保護者だけでなく、子どもたちの近くに居る大人と共に、子どもを真ん中にして考える機会をつくりたいと考えています。また、磐梯町が掲げようとしている教育に関する基本理念は、まちづくりの理念とも通じているところであり、大変抽象度が高いものとなっております。そこで、その理念を校長園長をはじめ教職員の方々にも理解していただけるように努め、学校現場での運営や実践について、トップダウンという形ではなく「共に作る」かたちを整えて進めていければと考えます。子どもの主体性を育むために、大人が「やりすぎない」ということについても子どもに関わる大人同士や子どもたちと共に話し合っていくことが重要だと考えます。
7	P15	「教育移住による人口増」 転入前後の情報の取りやすさ、親子のケアをぜひ。	よりよい教育環境を求めて移住を希望される方が、移住しやすい環境を整えることも大事ですが、移住後、子どもたちだけでなく保護者も新しい環境で過ごしていくことになることを忘れずに、基本情報の提供や、気楽な相談先、コミュニティへの関わりの機会など、町全体で取り組んでいく必要があると考えます。
8	P17	「0才から12才がまざる場所」 児童館に行かない子にも開かれた(行きやすい)場になると良いと思います。	児童館に登録しているか否か、ということに関わらず、「磐梯町のすべての子どもたちの放課後の在り方」について、考え、話し合っていくようにいたします。

令和6年8月作成